

現在、西欧諸国語の大部分は、ローマ字アルファベットによって表記されてある。この文字は“ラテン文字”とも呼ばれるが、そのことからも知れるやうに、ラテン語を表すために作られた表音文字なのである。ラテン語は、ローマ帝国の公用語であったから、それを表記するラテン文字は、ローマ字とも呼ばれるやうになったものである。

先に、ローマ字アルファベットの源流はスメール文字であると述べたが、最も近い源流はギリシャ文字である。そのギリシャ文字はフェニキヤ文字に由来する。

そのフェニキヤ文字がスメール文字に由来することについては、先にすでに述べた所であるが、これは正確に言ふと、スメール文字と言ふよりも、むしろアッカド文字と言ふべきであるかも知れない。

なぜかと言ふと、アッカド文字はスメール文字を借りたものではあるが、それは“表語文字”として借りたものであるから、フェニキヤ人が借りたのは、スメール語を表したスメール文字ではなくて、アッカド語を表したスメール文字だったからである。アッカド語を表したものは、元はスメール文字であってもアッカド文字と言ふのが本当だと思ふ。

そこで、“表語文字”であるアッカド文字から、どのやうにして“表音

文字”が作られたか、その過程を1、2の例によって調べてみることにしたい。

“A”はスメールで初めて作られた文字であるが、アッカド人によって、“牛”といふ意味で“アレフ”といふ発音のアッカド語を表す“表語文字”に変へられた、といふ事はすでに述べた通りである。

この“A”を、フェニキヤ人が、“牛”といふ意味を捨てて、単に、アレフの“ア”といふ音韻を表す文字としてこれを取り入れたのである。この「頭韻を借りる」といふのが仮借の場合、最も普通の方法であって、だからわが国でも、“安”といふ漢字を借りて、その頭韻である“ア(アンのア)”といふ音韻を表す文字としたのである。

同じやうに、“B”は“家”といふ意味で、ベートといふ発音のアッカド語であったが、フェニキヤ人は“家”といふ意味を捨てて、ベートの“b”といふ音韻(頭韻)を表す文字として取入れたのである。

このやうにして、フェニキヤ人は、自分たちの言葉が有ってある音韻を全部表せるだけアッカド文字を取入れたのである。この“フェニキヤ・アルファベット”は、僅かに“二十二字”に過ぎなかったけれども、これでフェニキヤのどんな言葉でも書き表すことが出来たのである。(僅かに二十二字と言ったが、日本語は十九字のローマ字アルファベットだけでどんな言葉でも書き表すことが出来る)

## 日本語の再発見

さて、ギリシャ・アルファベットは、このフェニキヤ文字を借りたものであるが、この時、自分たちの言葉を表すのに必要な五つの文字を新たに作って入れ、その反対に、自分たちの言葉には必要のない三つの文字を削り、差引き“二十四字”とした。

現代の花形であるローマ字アルファベットは、このギリシャ文字を借りたものであるが、借りるに当っては、やはり自分たちの言葉に合わせて、足りないものは作り、余分な文字は削って、現在行はれてゐるやうに“二十六字”としたものである。